玉川〔一名井堤川ともいふ、六玉川の其一なり〕水上は井堤里の東二里ばかり、和束といふ所より流れて、井手の南を過、玉水里を西へながれ、木津川に落入なり。左大臣山吹を愛し給ひて、玉川の汀に隙なく植させ給ひける。〔今其跡を御溝裏といふ〕花の輪は小土器の大さにて、幾重ともなく重りて、花の盛には黄金の堤などをつきわたしたらんやうにて、他所にはすぐれて侍りしなり。〔无名抄意取〕

古　今　山吹はあやなくさきそ花みんとうゑけん君がこよひこなくや

〔延五抄曰、此歌は諸兄の大臣の歌なり。山城の井手の寺光明寺を建立して、山水に款冬をうゑたり。其時高向の迦留大臣此山吹を来て見んと約束して不来時に読り。今の井堤の玉水其旧跡なり。云々〕

同　かはづなくゐでの山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

〔この歌は、ある人のいはく、たちばなのきよともがうたなり、清友は橘諸兄公の男なり〕

〔色葉集曰、井堤の山吹とは、ある説に、橘諸兄井堤寺を造りて、金堂四面の回廊のめぐりに山吹をうゑて、廊のうちに水を湛て花をさかせ、水にうつして見るやうにかまへたり。供養の日思はざるに讒言を帯て身まかりにければ、水の花をうつしてみる事もなくやみけるをよめるとぞ。又維清抄曰、諸兄公の宣ふは、我が一期の後にわれを思ひ出さば、此玉水へ来て見よ、影をうつして見せんとぞ〕

新　古　駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井手の玉川　俊　成

続　古　玉川のきしの山吹影見えて色なる波に蛙なくなり　後鳥羽院

堀　川　かはづ鳴井手の小川の水清み底にぞうつる岸の山吹　師頼

岩橋（いはは）〔むかし玉川にかゝりたる橋をいふ〕

家　集　かよひうし井手の岩橋（いはは）たどるまで所もさらずさける山吹　顕季